凱陣八島

近松門左衛門作

序　戯言も思より出で戯動も謀より作る。これ皆人心のなせるところ。爰に人皇七十七代後白河の院と崇め奉る。オロシゆゝしき聖主おはします。地されば保元の春の雪。風に音なき並木の庭右近の櫻左近の橘。外は柳に愛でさせ給ひ殊更今朝の白妙に。不老門の朝日影ッシ選きを願はせ給ひける。地然るところにみかはといへる十一歳の女の童。南面の御簾さら〳〵と下し北の星陰を見せ奉る。はや消えがての白雪を。しばしと思ふ心ざし深く感じさせ給ひ。其のかみ後一條の御時かゝる堰を見させ給ひ。香爐峰の雪もこれにはと宣はせけるに。清少納言やがて御前の御簾捲き上げけるを。いみじく褒めさせ給へり。此の心は樂天が詩に。遺愛寺の鐘は枕を欹てて聽き。香爐峰の雪は簾を撥げて看るとあるを即座に思ひあはせり今幼きものが心ざし。これにたぐへて優しやと感慨甚だ淺からねば。諸嘲一度に冠を下げッシはつと。感じて靜まれり。地其の頃源九郎義經は。平家の一族追伐し三種の神寶ことゆゑなく。都に遷し奉りオクリやがて〳〵參内ましませば。地斜ならざる叡慮にて重ねて官祿賜はるべし。彌々京都を守護し逆徒あらば鎮めよと。御暇賜はりて。御前を退出申さるゝ。義經の御威勢たとへていふべき。三重〳〵やうもなしッシはや堀河の地御所にもなれば武藏坊をはじめ各御前に召され。未だ平家の所縁洛中洛外に恐び居ん。事序に根を絶つべしさりながら。都の騒ぎ如何なれば。何卒密かに探す手だてもやとあれば辨慶承り。詞然らば屈竟の事を思ひ付いて候。何れも勸進物貫に姿をやつし。地家々に入つて檢分仕り候はんといへば各々横手を丁と打ち。これに越したる事あらじ。さあらば伊勢の三郎は社人こそよからめ。駿河二郎は富士禮定。常陸坊は盛無僧片岡は鹿島の事觸。辨慶は山伏と。夫々に片付けどもこゝに衆房一人何に見立てる役も無し。辨慶つくゝゝと見てなう。詞御身には似合はしき事あり。成程見苦しき姿して編笠深くかぶり。筑紫方の船頭なるが。播磨灘にて船を破りし者とて勸進せられよといへば。地扨見立てたり〳〵と各どつと打笑ひ。思ひ〳〵に出立つて手分をしてこそ。三重〳〵出でにけれ。ッシ扨義經は。地鷲尾とた〻二人。浪人らしく態を變へ笠ふか〳〵と君がため。神樂岡のあたりにてまづ花咲かす春雨に。梢の蛙鳴きつれて。ッシ飛ぶ蝶宿り求めけり。ハルッシしばし凌がん軒遠く。地佇む野路の後よりも。御所方の女の左に文筥右に傘。さ

すがの義經需れながら近よらせ給ひければ。イロなう誰ぞいの。地しやほに見知らぬ人ぢやがとフシ愛想なけによけにけり。地いやなう情の雨宿り これが情の雨宿りと言葉を重ね宣へども。人の御爲の傘ならずとつれなくも押出され。せん方もなき袂の雨 フシかゝる所へ。さも麗しき上臈にさしかけ傘の下道を。靜にゆたかに見えければ。地又これに移り氣のあとを慕ひて袖笠の打萎れたる御有樣。彼の姫見返り御覽じて。詞召連れられし女に此の傘たゝめとありければ。なう輕忽やこれ程降る雨にといへば姫聞き給ひ。地餘所の辛さを見て心なく行く事は。憐れ知らずといふものなり。最早宿も程近しそれ彼方へとの御世話にぞ。力及ばず乳母は傘を義經に參らせける。扨々忝しさりながら如何に御志なればとてあなたを濡し參らせてはと。姫君にさしかけ給へばいや苦しからぬに平にさして歸らせ給へ。いやお宿まで送り參らせそれよりさして歸らんと。互に辭儀の媒のフシ傘物言はゞ今ぞかし。地後には自と身に添ひて。裳裾にかゝる玉垂も互の思ひ數とりて。運ばせ給ふ御有樣辨慶遙の後より見て。詞やら不思議や。あれは確かに我が君なるぞ。ムゝ又例の持病の濡とやらんか。但しあの女平家方の者と聞付け仔細を問ひ給ふか。地いかさま不審と思ひつゝ御跡慕ひて〳〵三重參りけりさる程に。地彼の姫の御母上一乘寺の里におはせしが。御妹姫諸共に。何とて姉は遲きぞやと待侘びさせ給ふ所へ姉君歸らせ給ひ。詞なう御兩人ながらまづ家へ御入り有り。地雨を晴らしてお歸りあれとあればさあらば仰に任せんと。打連れて入らせ給へば母上不審晴れ給はず。詞してあなた方は誰樣ぞと問ひ給ふ姫君聞召し。いや誰樣かは存ぜねども。女ばかりの道覺束なしとて送りて給はり候なり。地なうそれは優しき御心入れや。蓬生の宿ながら暫し空の晴るゝ迄はと他事なき體に見え給へば。義經うれしく思召し立入つて見給ふに。姉に勝りの妹姫はつと驚き又これに移氣の。こは何人の所緣ぞとフシ暫く見とれておはせしが。必定これは平家方の人と思召し。詞平爾ながら見申すにかゝる處におはさん人々とも存ぜず。如何なる故にかと問はせ給へば母上聞召し。されば此の所は久我大臣殿。地御下館で候ふが。其の一人ましまさねば。斯く變るかな世の中に。悲しきものは自らとフシ涙を。浮べ宣へば。詞ムゝ扨は平家方の人々よな。地御痛はしやさり乍ら。移り變る世の中なればなにとぞ源氏へ緣を求め。姫君達を御片付けなされてはと。あれば。詞いやなう父上いまだ源氏に捕はれましませば。地如何なる憂き目にか逢ひ給はん。其の仕儀次第に我々は兎も角もと存ずる故。浮世の望なき中にも。若やは神の誓にて恙なき事もやと。それ故姉は祇園の社へ。日參致させ申すなり。地義經聞きも敢へ給はず。詞エゝ祇園殿の御利生はや見えてこそ

候へ其の故は。我々は堀河殿へ別して出入るものなるが。氏素性よき人ならば。假令平家方の人なりとも容貌次第に北の御方と定め。朝敵なりとも其の罪申し宥められんとの御事なり。姉姫を差置き異な申し分なれども。妹姫こそ必定御氣に入らせ給はめ。何と鰥介致さんや母聞召し。姫こはそも神の教かや。さもあらば。父上の御命に恙あらじ。さり乍ら妹は妾と繼しき中なれば。世の取沙汰も如何殊に順義と申し。姉を申入れて給はれ義經聞召し。調いや判官殿の御望の年頃妹姫にて候へば。姫是非にこれをと宣へども。母上承引ましまさねば何とも詮方なほざりに。スエテ思ひの種とぞなり給ふ。姫辨慶は先刻より垣の外に聞きゐるしが。扨も〳〵惡性人かな。調さり乍ら。よつく執心なればこそと門外に突つ立ちて。熊野山年籠の山伏。人相八卦相性。所禱何にても御用はなきかと呼ばはつたり。判官ちやくと推しこれ〳〵お山伏。頼みたき事ありお這入りあれと呼び入れ。なう二十八の男と十八と十六との女二人の内。何れが相性よからん考へてたべ辨慶聞きもへず。それは考ふる迄もなし二十八の男に十八の女。水剋火として大きにわるし。十六の女こそ金生水として大吉なり。此の緣を組み給へば佛神の納受に叶ひ。何事も心のまゝならんといへば母上聞召し。姫いかに順の達へばとて惡緣は結ばれまじ。此の上は妹を申入れてたべとある。調姉君せいたる風情にて。上手の八卦さへ合ふも不思議合はぬも不思議。何あの山伏づれがいふ事誠にばししし給ふな。姫しやほに水は逆に流れずといふに一生男を持たねばとて。姉を差置く緣やあるとスエテ大きに不興じおはしけり。姫義經聞召し御理さり乍ら。惡緣を結ぶは災を招くに似たり。誠さ程に思召さば。いざ某と御身夫婦の契約は致すまいか。姉君顔打ちふつてせゝ笑ひ。調義經さへ不足に思へど親達の爲と思へばこそ。姫如何におちぶれたればとて。御身づれの緣組はちと推參ならめと フッ赤面。してこそおはしけれ。姫扨も移り氣な女郎や。今日道づれのお心入れ情の程を無になして。義經ならばと宣ふはちとさもしく存ずるなり。よしそれは兎も角も。調實正某との緣組はいやの。アヽ聞きたうもな。姫耳のけがるゝに重ねていうても貰ひませじとある。調義經につこと笑ひ。調アヽ重ねて申さじ扨は思ふまゝの仕合せなり。姫御身に嫌はるゝ某。こそ濁の判官よ。此の上はいよ〳〵妹姫を賜はれや。一命に代へても大臣殿の御科は。申し宥め申さんに御心安かるべし。幸ひ今日は吉上日緣組事始めそれ〳〵と有りければ。いたはしや姉君面目なさうにおし俯向き。しを〳〵としてましませば。妹君笑止がり。いや是なう姉君樣。それと知らずば天子の事をも言ふまじきものにてなし。往てば甘露の日和ありとや。自ら新樣になる上は。御身樣もいかならんやごとなき御

方へ。追付け行かせ給ふべし必ず悔み給ふなと。樣々諫め給ひぬるッ心の内こそやさしけれ。地其の内に辨慶堀河へや通じけん。龜井片岡伊勢駿河佐藤忠信常陸坊。種々の雜餉認め道をつどはせ參りつつ。是はめでたき御事終夜のお酒裏飲めや。謠へや。尤と差いつ。差されつ入れ亂れ君は千代まで。千代ませと繰言を。祝ひ謠ひつれ堀河殿に歸らゝ是ぞ義經の武運の盡き。家の亂るゝ始ならんと悔まぬ。人こそなかりけれ。言上仕る如く今度の戰半にも。船中にて維盛の御息女と内通あり。それのみならず勿體なくも女院への御戯れ。彼此御本意に候はずと遺恨を含み讒しければ。地頼朝なほ〳〵御立腹して北條の四郎に仰付け。三千餘騎を差添へられ急に打立ち滅せと奥をさして入り給へば。時政おうけを申されて既に仕度と三重〳〵閉えけり。フシ此の事かくれ。地あらざれば無念ながらも義經は。罪なき御身を隱家の吉野の奥もあらはにて。又都に立ち歸り密に忍びおはせしが。辨慶をはじめ何れも心底を定め。いざ鎌倉勢をこゝに引受け潔く討死し。名を後の世に殘さんと云へば判官聞召し。かた〴〵が存念至極せりさりながら。疊なき身を徒に果つべき事も口惜しし。一先づ奥州に下り秀衡を頼み。時節を窺ひ見んとあれば。辨慶承りはて兎角は君の御計らひ。誰かは漏らゝ者候べき。とはいひながら我が君の。數萬の敵にも遂に御後を見せさせ給はぬに。親兄の御禮儀を重んじての御一言。返す〴〵も殊勝やとフシおの〳〵袖をぞしぼりける。地さあらば片時も早くと末々の者共には皆御暇を賜はり。主從以上十二人山伏姿と相定めさて北の御方へ此の由かくと語らせ給ひ。とても長旅及び難し。都に止まりおはしませ。追付け迎ひ越すべきとスエテ涙と共に宣へば。地こは情なき仰せやな何とて殘りあられうぞ。御供かなはぬものならば浮世にながらへ何かせん。命のお暇たまはれと聲も。惜まず泣き給ふ。辨慶御痛はしく思ひけに御道理至極せり。御心安く思召せ御供せさせ參らせん。某次第になされよと兒の姿につくりなし。旅出立の檜笠。まだ夜をこめて今出川明方急がせ三重〳〵諸共に。フシあはれと思へ山櫻。花に心を蘇民書札の。姿に變ふる人々の。御有樣こそ痛はしけれ。住みて久しき都をば。立つや霞にこがくれて。フシオクリあとにへ〳〵見な

義經道行

すや音羽山ノ鳥の啼く音も　はらハ〳〵。はらと落つる。涙はしばしが程も。なう山科の里も過ぎ。今は難しや又いつか。世に逢坂の關の戸を。叩きてあくる空見れば。汝もわりなき方にこそ。花を見捨つる雁も。同じ越路の旅なれど心ことなる憂身とて小オクリ見しや。見知らぬ人にさへ。オクリ忍ぶ小笠の。深々と深き思ひの種をしも。如何なる世にか蒔きおきて。はからぬ旅の道急ぐ左手は三井の古寺や此の。鐘のつく〳〵物を観ずるに。一榮一落春秋と移り變れる定めなさ。無實にも如夢幻。泡影と法の。教フシは聞き乍ら。など厭はぬや假の世を。いや果敢なくも。悟り得ぬ。流轉生死の海にのみオクリ沈みつ。浮いつ〳〵沈みつ行く船は。さしもぞ寄する漣や。志賀の濱松年古りて誰が代に引ける子の日ぞやこれ唐崎の事問はん。飛交ふ千鳥八つ六つ。七の社を伏拜み。見渡せば花も。紅葉もなかりけり。浦の苫屋のあけぼのは。夕を秋と。誰かは思ふ山わきに。巖あやしき風景は。今の物憂き身にフシだにもすこし慰む便りかや。漫々たる湖上の雲。過ぎ來し跡を見返れば。故郷杳にして際も無く。日暮且孤征と。唐土人の故事迄も思ひ出でつゝ口すさみ。磯邊に拾ふ。玉村の。里に立ちぬる薄烟。つゝみ燒なる堅田鮒。文の傳手さへ長濱の。行末守れ白髭の。神の社や和げる光。のどけき。日の出が岬うたゝ寢覺の。床の海詮方も無き歎きには。比べて類荒乳山春雨の降りそ。めしより一入に。雫に見ゆる木の芽山ア〳〵。あれ。あれ〳〵荒れし。軒端の板取川。苦しき。瀬のみ越えつれば　冷泉いつの間にかは秋元の。宿の秋風福井とや狭き。袂に。せきかねて。餘る涙や森田の宿。さなきだに憂きを重ぬる旅衣。きて見る事も思ひきや。ハヅミ目馴れぬ村々里々を。覺束なくもたどりぬる。心は猶も細呂木や。大聖寺ぞと聞くからに。スエチ　おの〳〵法施を奉り。來た世を頼む蓮の浦。ツシ憂節しけき竹の橋渡るもつらき。身の仇なるは石の燒か。城ふりて昔。上野の。草も木も繁みて道に踏迷ふ。こゝは三國の。港なる。小オクリ出船入船數々の。品かはりたる憂き業に音信とては小夜嵐。思ひもしのに篠原や。日數を經れば程もなく。名にのみ聞きし加賀の國。安宅の。浦にぞ着き給ふ。地然る所に往來の者ども行違ひ。詞扨も安宅には新關すわり何かは知らず山伏達を堅く改めらるゝ由と言捨てて通りけり。地何れもはつと驚き一期の浮沈此處なりき。詞所詮打破つて通らんといふ辨慶聞いて。詞いや〳〵こゝは大事の所。尤も打破つて通らんは易けれどもまた行先の難儀。地隨分陳じて通るべし。若し其の上に異議あらば思ひ設けし事と云へば君聞召し。げに〳〵御分がいふ通り然らば陳じやうの相談こそあらめ。先づ〳〵此方へ〳〵と。片山陰の森の中へ各召連れ。三重入り給ふ。是は扨置き。八地安宅の關をば富樫の左衛門承り俄に堀ほ島

り塀をかけ兵具ひつしと立て並べ。備へ厳しき其の氣色フシ鳥も通はぬ要害なり。地さるほどに判官は。辨慶を先達にてさも大様に來らるゝ。詞番の者ども聲々になう〳〵容僧たち。是は鎌倉殿よりの仰にて山伏達を改むる關なり。地一人も通さじとひしめく辨慶不審がましき顔付にて。詞いや我々鎌倉殿より改めらるゝ科を持たず。但し山伏道の修行が天下の法度にばしなり候か。時に左衛門つつと出で。いや〳〵左様の事にあらず。頼朝義經御仲不和になり給ふにつき。判官殿十二人の作り山伏となり奥へ御下向の由聞え。改め申せとの御事といふ辨慶聞きて。あら嬉しや仔細承らぬ内は思はぬ氣遣ひ致して候。其の判官とやら此の中に遂に見たる者も候はず。地我々は南都東大寺建立のため。諸國をめぐり候が何と奉加に付き給はぬか。詞左衛門聞いて ホ、。かた〳〵を誠の山伏にしてはすけ取り難く候よ。地殊に同道十二人。疑もなく判官殿ならん。一人も通さじとひしめく辨慶少しも騒がず。詞なに誠の山伏ならじとはして。此の中に其の判官と紛らはしきもの候か。いや紛らはしくもなく正しく御身は武藏坊辨慶。あれなる色の白きが判官殿よ。所詮一人も通さじといへば辨慶から〳〵と笑ひ。さて〳〵嬉しや日本一のつは者に我々が似たるとや。是は好き目利とやいはん不目利とや申さん。地さはさりながら富樫殿。御身鎌倉殿を主君と頼みましまさば。義經も共にお主筋。御仲不和なればこそさすがの義經。姿を變へて忍ばるゝを是非に檢めの顔さんとは拠もさもしき心入れ。悉皆それは武士たるものの所爲ならず。よし又我々誠の義經辨慶ならば。此の關の五百や千の人衆小指の先にもかくべきものか。御身武士の道を知らばたと誠の義經と見るとも。かゝる形になり給はゞ哀憐を垂れ通さんこそ本意ならめ。近頃不祥なる所へ來懸つたるものかなと。各一所に立並び。びくともせば踏みつぶさんと思ひ込うだる其の氣色。如何なる天魔厄神もフシおそれつべうぞ見えにける。地左衛門聞いて尤なりさり乍ら。詞最前東大寺建立の勧進と承り候。定めて勧進帳の候べき聽聞致し候はん。地もとより勧進帳のあらばこそ。往來の卷物取出し勧進帳と名付け。高らかにこそ讀上げけれそれ。つら〳〵。惟れば大恩教主の秋の月は涅槃の雲にかくれ。生死長夜の長き夢。驚かすべきフシ人もなし。こゝに中頃帝おはします。御名をば聖武皇帝となづけ。奉り最愛の。夫人に別れ。戀慕やみ難く。涕泣眼に荒く涙玉をつら。ぬく思ひを。善路に飜して廣舎那佛を建立す。斯程の靈場の。絶えなん事を悲みて。俊乘坊重源。諸國を勧進す一紙半錢の。奉財の輩は。此の世にては無比の樂にほこり當來にては。數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首。敬つて白すとフシ天も響けと讀上げたり。地左衛門聞いて此の上は。たとひ判官武藏にもせよ許し

申すに早々通り給へ。詞なに仔細なし通れとや。然らば落居のうち暇を取り奉加に後れ候へば。御大儀ながら是非勸進帳に付き給へ。地實に〳〵現世後世の爲とて鳥目百疋出しければ。詞いやなう富樫殿。大儀は一度名は末代。地御身も名ある。侍の鳥目づれは見苦しゝなまじ付かずば付かぬまでよ。せめて金十兩といへば富樫ぎよつとして。詞扨々驚こき山伏かな。關を許せば奉加を望む。奉加につけば少分なりと却て我を恥ぢしむる。地とはいへ判官ならば許さるゝを悅び仔細なく通られんが。誠の山伏知れたりと又百疋取出し。何卒と存ずれども某も貧しければ是にて堪忍し給へと。やう〳〵詫ければ辨慶苦々しき顏ばせにて。エヽ輕微なれどもといらたか珠數を押し揉んで。皆一同に聲を上げ東方に除三世。南方に寶茶利夜叉。西方に大威德北方。金剛夜叉明王中央に。大日大聖。不動明王願くは。判官殿を此の關守の手に渡し。動功解狀に預らしめ給へと高らかに唱へ心中には。南無八幡大菩薩願くは我が君を。事故なく奥州へ送り届けてたび給へと。腰なる法螺貝押つ取り。押つ取り天も響け。大地も裂けよと吹立て。〳〵〳〵暇申してさらばよとて。おの〳〵打連れ通らるゝ虎の尾を踏み毒蛇の口。危かりける次第なりとて聞く人身をこそひやしけれ。

第三

ワキよしや義經ならぬ身の麻衣。御姿さへあるものを色を變へ。品を變へ。多くの難所を凌ぎつゝフシ出羽の國に入り給ふ。地是に高札の立て有り。詞なに〳〵佐藤の館にて山伏搦待と候いざ御つき候へ。カネ〳〵兼房聞いて。佐藤の館憚りに候程に直に御通りあれかしと存じ候。甲〳〵辨慶聞きもあへずいや〳〵。義信忠信が草の蔭にて怨みん所も有り。地たゞ知らぬ樣にて御つきあらうずるとて。おの〳〵オクリ〳〵内にぞ入り給ふ。地辨慶鶴若を見て是は誰の御子息ぞ。子詞〳〵さん候佐藤繼信が子にて候ワキ〳〵扨繼信は御内に御座候か。子〳〵判官殿の御供申し八島の合戰に討たれて候ワキ〳〵あら笑止や此の搦待は誰の御企候ぞ子〳〵さん候判官殿十二人の作り山伏と成り奥へ御通りの由承り。祖母にて候者此の搦待を始めて候。見申せば方々こそ十二人御入り候へ。若し判官殿にては御座なく候か。ワキ〳〵ヤヽ暫く。かゝる疎忽なる事を申さるゝものかなまづまづ内へ御入り候へ。子〳〵如何に祖母君。山伏達の十二人御着きにて候。シテ〳〵喧し〳〵フシ舊里を出でし。鶴の子の。松に歸らぬ淋しさよ。地實にや憚有る身として。御前にまゐりて候へば。且は亡き人の名をも下し。又は子供の古への恥をも。顯すにては候へども。餘りに御懷しき心ばかりにて。御前に參りて候なり。是は故佐藤庄司が後家。繼信忠信が母にて候。實にや親子恩愛の別れの餘りには。包むべき人目も知らず。又は憂身の恥をも。顯すにては候へども。さりながら。此

の攝待と申すに。現世の祈の爲にもあらず後生善處とも思はず。嫡子繼信は八島弟忠信は。都にて失せけるとばかりにて。詳しき事をも知らずして。ひとり悲む身を知る雨の晴れぬ。思ひや慰むと。此の攝待をはじめて候。札を立ててより此の方。一日五人三人。乃至一人二人、絶ゆる事はましまさねども十二人は今が始めにて候何れか我が君ぞ。何れか其にてましますぞ。夜も更けたり人の知るべきにもあらず。この姥が耳に密と御語い候はゞ。此の攝待の利生にて空しくなりし繼信を再び見ると思ふべし。親子より主從は深き契の中なれば、さこそ我が君もあはれと思召すらめ。殊更御爲に命を捨てし郎黨の。一人は母一人は子ぞなり。などや弔ひの御詞をも出されぬ斯程數ならぬ身には思ひのなかれかしッあら恨めしのうき世やな　ワキ地　辨慶聞きてこれは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等如きの山伏の、五人三人打連れ〳〵今夜十二人泊りたればとて。判官殿とはかゝる疎忽なる事を承り候、詞さりながらまことに繼信の母にてましまさば。判官殿の御内の人少々見知り給ふべし。所詮そなたより名をさして御覽候へ　シテ　仰の如く我が子は御内にありし者なれば。大方推量申したりとものみ違ひ候まじ　カヘ　先づ斯樣にもの申す山伏は何處山伏と御覽じて候ぞ　シテ　さん候只今物仰せられつる客僧は。此の御供の中にては一ぬ老歳にて御渡り候なゝ。此の御供の中にて年寄りたる人は誰そ。今思ひ出したり。判官殿の御乳母の親。增尾の十郎權の守兼房山伏候なゝ　カヘ詞　年寄りたるが兼房ならば尼公も兼房にて候べきか。シテ　扨是なるは何處山伏にて御入り候ぞ　ワキ　是は出羽の國羽黑山より出でたる山伏にて候　シテ　いや是は播磨の人の聲にて候ものを。地それを如何にと申すに姥はもとより播磨者。十三の歳繼母を恨み都に上り故庄司殿と契をこめ。繼信忠信をまうけ今かく憂目を見候へば。只恨めしうこそ候へ。されば我が國の人の聲なればなど聞き知らで候べき。詞いで此の御供の中に播磨の人は誰そ。地是も思ひ出したり。判官殿鵯越とやらんの御時。狩人の姿にて參りあひ。其の儘苗字を賜はり。今迄も御供と聞えし鵜の尾の。十郎山伏候なゝ　ワキ詞　扨又かやうに物申す山伏をば何處山伏と知召されて候ぞ　シテ　是こそ大事にて候へ京の人の聲かと思へば又近江の人の聲にも似たりゝいで御供の中近江の人は誰そや。地されば誰こそ始めより。器量骨柄人に優れ何とやらんもの恐しけなる御有樣。天晴是は辨慶山伏御座めれ。それならばもとと近江の人三塔一の惡僧今は我が君の。一人當千の武夫よなう武夫と武夫も。物の哀は知るものを。などされば餘に御心强くましますと。袂に縋り聲をあげ人目もッシ知らず泣き居たり。子詞　鶴若見參せ如何に祖母御前。詞かほど心も無き人々にさのみ言葉を盡さん

より。今は内へ御入り候へ。判官詞　是なる童は怜悧きこと申すものかな。まこと繼信が子ならば主君判官たるべき著を擇つて出し候へ　子地　承りて候と十二人の山伏の。みな御顏を見廻しこれこそ其にておはしませ判官詞　扨其にて有るべきいはれは如何に。子地　いやいかに包ませ給ふとも。人にかはれる御粧ひ疑もなき我が君よ父賜べなうとて走り寄れば。判官　岩木を結ばぬ義經なれば　スエテ泣く〳〵膝に抱き取る。地雲にや柄檀は二葉よりこそ匂ふなれ。誠に繼信が子なりけりと、フシ皆涙をぞ流しける。ワキ詞　言語道斷此の上は何をか隱し申すべき。是こそ我が君にて御座候へ近う參りて御目にかゝられ候へシテ地　我が君を拜み奉るについて。子供の事こそ思ひ出られて候へ。扨も繼信は八島にて。剛なりとも申し又不覺なりとも申す。最期の有樣承り度く候判官詞　判官聞召し。如何に辨慶、詞繼信が最期の仕儀詳しく尼公に語つて聞かせ候へ　ワキ詞　畏つて候。御諚と申し御所望といひ。終夜語つて聞かせ申さん近う寄りて御聞き候へ。扨も八島の合戰今はかうよと見えし處に。地門脇殿の次男能登守教經と名乘つて。小船に取乘り磯間近く漕寄せ。如何に源氏の大將源九郎義經に。矢一筋參らせん受けて見給へと罵る。かう申す各を始めとして。我も〳〵と御矢面に立たんとせしが。何とやらん心後れしたりし所に。繼信は心勝りの剛の人にて御馬の前に駈塞ぎ。義經是にありとて靜々と控へ給ふ。其の時に教經は。引設けたる弓なれば矢坪をさしてひやうど放つ。過たず繼信が着たりける。鎧の胸板押付總角かけずたまらずつつと射通し。後に控へ給ふ我が君の御着長の草摺にはつたと射留む。扨其の時に繼信は。馬に乘直らん〳〵としけれども大事の傷なればちつとも堪らず馬より下にどうど落つ。やがて我が君御馬を寄せ。繼信を陣の後に擔せ如何に繼信。如何に〳〵と宣へどもたんだ弱りに弱つて終に空しくなる。なんぼう面目もなき物語にて候。シテ地　なう其の時に弟の忠信は候はざりけるかワキ　あら愚や忠信の御事は。日の下に於てかくれなし能登殿の童菊王丸。繼信の首を目懸け渚の方に走上るを。忠信取つて放つ矢に菊王丸が眞中射通され。かつばとまろべば教經船より飛んで下り菊王が。綿上つかんで遙の船に投入れ給へば程なく船にて空しくなる。眼前兄の敵をば。弟の忠信こそ取つて候へ　シテ　扨は敵も大將に仕へ申せし御童。ワキ　繼信は又我が君の祕藏に思せし御内の人　シテ　彼は平家の船の中　ワキ　こなたは源氏の陸の陣　シテ　彼も主從　ワキ　是も主從　シテ　思も同じ思なれば　ワキ　餘所の歎を思ひ合せ御慰み候へとよ　シテ　それは仰までも候はず。御身代りに立つ上は今生後生の面目なり。フシさりながら。命ながらへ。御供申し。御笈をも肩にかけ此の御座敷にあるならば。十二人

の山伏の十三人も連りて。只今見るとも思ひなばいかゞは嬉しかるべき。扨なう弟の忠信は都にて死したるとも申し。未だながらへあるとも申す。序に語つて御聞かせ候へ。ワキ詞〈されば忠信は君の御行方を尋ねかね。都に忍びある由六波羅より聞付け討手向ひ。遂に六條堀河の御所にて。我が君を拜み奉ると思ひ自害せられたると承り候シテ地〈なう問ふに辛さの増り草葉末に残る白露と。思へばあさましき長生やな。去年の春忠信わざと人を下し。繼信討たれたると聞きければ。身も絶えなんとは思ひしかど明年の春の頃。忠信下らんといふ嬉しさに。繼信が事は餘所になり。あはれ今年も早く經ち。新玉の春も來て忠信も來よかしと。思ひし事もあだし世に生けて物を思はんより。殺してたべや人々とて前後も。さらに無かりけり。ワキ地〈君を始めおの〳〵誠に道理至極なりとてスエテ共に袖をぞ絞らるる。地由なき長物語のうち夜が明けて候。奥とは程も近ければ。おつつけ御入りあられうずる間いざ御立ちと勸め奉れば。子〈鶴若是を聞き如何に誰かある。詞馬に鞍置き弓靱おこせ君の御供申さんにワキ詞〈やあ御供とは何ごとぞ子〈君の御供申してこそ親の敵に逢ふべけれワキ〈それは弓矢の道これは修行の山伏道に何の敵のあるべきぞ子地〈さあらば小さき兜巾篠懸をこしらへて給はれ。山伏道の御供せん。ワキ〈辨慶しばし涙を抑へ。天晴繼信が子かな。誠御供有りたくば。今日は道具をこしらへ給へ明日は迎に參るべし。子詞〈まことさうか。ワキ〈なか〳〵にカヽ地〈我も迎に參るべし。ワキ〈我も迎にまるらんと。面々聲々に勝され稚き身の悲しさは。誠ぞと心得て少し詞の弱りたる折を得て客僧は泣く〳〵奥へぞ下らるる此の人々の心の中。物の哀れは是なるはと聞く人。袖をぞ絞りける。

第四

此處も旅寢の袖の浦。ひそかに出羽の國よりも秀衡が館に入り給へば。入道驚き子供を連れ御前に罷り出で。詞此の度の御下向誠に勿體なくこそ覺え候へ。地其の上北の御方さま越路の雪の憂き難所。夜寒の衣薄き御姿。返す〴〵も御痛はしシエテと涙と共に申さるる。義經聞召し今更の事ならねど。いよ〳〵賴ゞと宣へば。こは冥加に餘る御諚の趣やあ子供等。只今の御一言たとひ秀衡死したりとも。必ず〳〵忘るなる。誠に某が長生も思へば天理にかなへり。是非鎌倉へ伺候して。直に言上申し御仲直し奉らん。御心安く思召せと扨人々にも挨拶し。先づ寢殿に移し奉り好きに饗應仕れと。心底殘らぬ有樣は實に賴もしくぞ。三重〈見えにける。頃は卯月の。地初の八日秀衡が乙の姫。千種の前とて未だ二八の春も過ぎ。折節に咲く東路の躑躅が岡の花車。欄干に轟かし。詞奥樣へお取次賴みませんといふ處へ。判官ずつと出で合せやゆ、してこれは何處からぞ。地姫少し會釋して。妾が母の方よ

り奥様へといふしほらしき顔ばせに義經ほうどなづみ給ひ。先づは見事の花車。引手のお名はと問ひ給へば。詞千種と申し候なり。地かゝる田舍の末の松山花の波、色よし振よし濡れの盛りと手を取らんとし給へば。しやほに何の田舍者をと思はせ振して立ち歸る。姿の惜しや雄島の蜑の重ねて便の船もがなと。あとなつかしけに見送り給ふ所へ北の方出でさせ給ひ。さて美しの花車いづかたよりと問ひ給ふ。詞いや秀衡が女房の。地方よりと。宣ふ内にも戀の山。千種に思ひ餘りてや上の空なる御有樣北の方御覽じて。君は御心に戀る事ばし候か。唯うか〳〵と見えさせ給ふがとあれば義經ちやくとよい衛を出し。詞されば此の花を見てふと人界の仇なる事こそ思はるれ。地盛りは朝の露散るは夕の風を待たず。とゝく菩提心を起し。一七日坐禪して。心を凝し見んとあれば北の方驚き給ひ。なう今やなど後世の道さりとは思し止まり給へとたつて歎き給へども。いや先づ靜めて聞き給へうどなづみ給ひ。我年月の合戰に人を殺すこと數を知らず。其の罪いかで免れん修羅の苦み目の前なれば何卒此の苦を遁れたき願。御身とも又後の世を。一つの蓮の望ある故なり。スエテ惡しく心得給ふそよ。地はて其の御心入れならば兎も角もとは云ひ乍ら。少しの間さへ待遠なるに七日逢はではいかにぞや。あられうものかと宣ふをいろ〳〵偽り宥めさせ。表の座敷に出で給ふ心のオクリへうちこそ嬉しけれ。地さて辨慶を近う召され四方やまの御咄の次に。詞何と世の中に止めがたきものは。色欲の道にてあるまいかと宣へば。地隨分堅き武藏坊。誠にそればかりは止むまじき事と打笑うて居たりけり。判官好き首尾と思召し。いやこれ辨慶。詞それにつき近頃言ひかねたれども。地默止がたき戀路ありて奥をば斯樣に誑りし。迷惑ながら其の方我が身に代り。坐禪してくれよとあれば辨慶呆れて御顏を眺め。詞も又止めさせ給へといふ義經はつと思しながら。此の度ばかり不承ながら是非に〳〵と宣へば。地はて料簡もなし。仰なれば兎も角もと座を占めて。衣引被きし有樣はフシさながら。鬼に衣なり地判官悅喜ましましとかういふはくだなれば。最早行くぞと宣へば辨慶不興顰にて。詞これ〳〵隨分早く歸らせ給へ。遲くば。此の役目斷りなしに引き申さん。地ヲ待たせはせじといひ捨てて。千草の前のおはしけるオクリ妻戸に忍ばせ給ひけりフシ早更け過ぐる。小夜嵐。囁さこそ。袖の朝明け思ひ遣れて北の方。銚子盃取添へて物靜にさし足し。密と覗き見給ふに。行ひ澄しおはします。扨も〳〵お志のかくも變らせ給ふものかは。さりながら俄に左樣に遊ばしてはお氣詰りもやと煩し宵よりの御心ばらしに。酒一つとより給へば辨慶ぞつと寒氣立ちフシ頻りに頭を振るにけり。詞ムム扨は御行の邪魔にばし成り候か。地併し常にお好きなれば。ひらに〳〵と强ひ給ふ辨慶心

に思ふやう。いや〳〵こゝは飲んで德。又早く歸すためと思ひ盃の下より手を出し。たぶ〳〵と引受け。押俯向いてずつと干し。すくりまた差へ出しちやうど。地うけ。飲む中に我を忘れ。頭を撫でては。好い氣味かなと。いふ聲に驚き顏さしのぞきこれは如何な事。扨も憎やと衣引除けなう殿は何處へやり給ふぞ早く言はれよ 腹立やと荒氣なく咎められ辨慶ほうどゆきつまり。詞いや未だ讃岐の八島にと地何をいふやらわけもなく。フシ跡をも見ずして遁げにけり。地エヽ腹立や胸の燃ゆるは鹽釜の恨みは君にと衣引被き。武藏が如く座を占めて。今や〳〵と待ち給ふ御有樣こそ三重へたゞならねゝ。フシ花の錦の。下紐は。解けて驚なか〳〵よしなや柳の絲の亂れ心。いつ忘れよ信夫の里のフシ信夫摺見えすく見えすく。薄き情と思はれず。や。早や鷄が啼くさぞ辨慶や待ち兼ねんと。立歸り見給へばつつくとして坐してあり。詞さて〳〵待ち遠からん辨慶。抱きついて。往うとも戻らうとも。何とも。さりながら先へ行きての首尾いやはや詞に盡されず。とてもの事に君が情の有樣語つて聞かせん。地とはいへおき〳〵には遠慮あれば。窮屈ながら今暫く其の儘衣をかぶりて居よ。詞ム、なに心得たとて頷くか。地オヽさあらば語るにつけ。かゝる東の果しにも亦あるものぞ優女。しんぞ都恥しく歌にて口說けば歌にて返し。譬喩でなければ譬喩で受け。どうもならぬをやう〳〵と辭け。床の打解け語らひは。いやはや何の因果に山の神めを遙々連れては下りしぞ。扨て來し方行末の物語のうち孀鴉の啼く聲聞ゆ。詞夜や明けぬらんはや歸らんといへば。彼の姫じつと手を取りて。ウタ鴉が啼けば。も往のとおしやる月夜の。鴉。何時も啼くと唄ひとめられし程に。地いやや〳〵はや明くるやらあれ。あれ〳〵 曉の明星が。西へちろり東へちろり。〳〵〳〵とする程に。往うよ。戻らうよといへども小腰に坐してあり。詞さて〳〵待ち遠からん辨慶。抱きついて。往うとも戻らうとも。何とも。其方の御計ひと。フシいうては袂を引留めて。鷄も啼け。鐘も鳴れ。なれなれしけれど。しめてお寢れの夜は夜中と樞の樣な御手にて。其が背をほと。ほとと叩かれれば。何の事が思はれう。わんざくれ命諸共とは思へども。東雲やう〳〵明方なれば。御名殘いつまでもつくる。世更に候はじと。是非なく歸れば送りて出で。剛れ參らせずば如何ばかり今の思ひはせまじをと。ステチ怨めしけなる別れの程やれ辨慶。詞鬼の樣なる其方なりとも心の引かれまいものにてなし。地や。嘸窮屈ならんさあ〳〵最早衣をとれ。何否とてかぶりをふるか。地さては遲く歸りし腹立チヽ。道理さりながら。詞今少し早く歸らんと思ふところに。彼の蛾靜が事を問はせられてな。其處で大きな嘘をついたは。地其の靜めは碎な者ならず。それゆゑ京に捨ておきしといへば。又與か風情を尋ねられし程に。詞猶々誹つていや〳〵。人の交りする者にあらず。地心入れのあし

さ生れつきの可笑さを。譬へて言はば何にかは。とつと深山の其の奥山の。こけ猿小猿が雨にそほ濡れてひ。ひつくばうてかいつくばうてさうしてかうして物として。どこにひとつの取柄がないぞいのヨドリウタ頭も禿てゐ。會釋はなうてヲヽ。怖い顔ぞと云ひければ。地それはまた何人の息女ぞとある程に。何の数ならぬ曦原の樵人が娘なりと答へたと。宣ひもあへぬに北の方堪り兼ねとびかゝる。義經周章ててやれ悲しや辨慶。頼みがひなしと振切り給ふを容赦もなくしがみつき。詞して妾が父の何時樵人をせられしぞ。地如何に戀の便とても餘りなる御仕方と。御髪を取つて引きつけ給へば。さしもの義經貫付けられ。苦しけさうな聲音にて。いや〳〵ひよつと不調法眞平御許し〳〵と。わびさせ給ふを辨慶物蔭に聞き居しが。おづ〳〵立出で。詞先づかうあらうと存じた事。是は奥樣の重々御道理最早堪忍あそばせと。地是非に御手を引放せば。面目無さうに判官はむづ〳〵と起直り。悄〻としておはせしはフシ手持無沙汰に見えけり。地辨慶あまり笑止さに。詞此の上は某隨分御意見申、さん兎角堪忍あそばされよ。若し其の上にも止み給はずば。屹度訴人致す儀といへば北の方聞召し。いやこれ悟氣ばかりで申すになし。地今は大事の御身なれば。人の譏世の妬み秀衡殿に聞えても。よからぬ事と存ずる故とフシ其の理を詰めて宣へば。地義經もほうど詰らせ給ひいやなう尤是に懲りぬ者が誰があらうぞと。苦笑ひの御有樣辨慶をかしく思ひ。詞誠に威言の言置きは申されず。我が君は勿論この武藏めも。一生物の怖しいといふ事を知らず。地又數萬の敵に逢うても遂に後を見せざるに。今宵奥樣の御氣色には。ぞつと身の毛がよだちて足もなえ心消え。逃ぐるに途方を失ひし。あら勿體なや忍はしや懲りさせ給へ重ねては。此の武藏は存ぜぬと後にはどつと打笑ひ。お暇申して立ちにける彼の辨慶が逃振と。又義經の難儀の體。嫉妬ならずばかくやあらめと皆人。感するばかりなり。

第五

有爲無常の響とて佐藤秀衡は。文治四年冬の末。終に空しくなり給へば義經を始め奉り。一家一族諸共にスエテ憂に沈むばかりなり。地されども日數重なれば。七日〳〵の御弔オクリ實にも殊勝に見えにけり。地扨も秀衡死去有りて百箇日も過ぎざるに鎌倉殿より御教書下り。秦衡が出居にして兄弟五人拜見す其の文に曰く。詞何とて奥の一黨は。悪逆の義經に與し頼朝に敵をなす條其の武名を知らず。早く義經を滅し鎌倉に降參せば。勳功厚くあて行ふべきものなり頼朝判とぞ讀上げたり。地兄弟皆くとかうも云はず目と目を見合せ居たりしが。總領しきとて秦衡押つ取つていふ樣は。詞何れも如何思はるゝぞ。御教書の如くよしなき義經を主と頼み。下りまじき處にて馬より下る

ゝも無益なり。地いざ討取つて鎌倉に捧げ。勳功に預らんいかに〳〵といひければ。錦戸をはじめ四郎元義樋爪の五郎みな尤とぞ同じけり。中にも和泉の三郎涙をはらはらと流し。詞扨々勿體なや幾年生きんとてかゝる事は宜ふぞ。地父上も此の事を。末期迄言ひ置きいづれも。起請を書かせ。世に嬉しげにて死し給ふ其の遺言を空しうし。お主に弓を引かん事生きては家の名を下し。未來の業は如何せん此の事に於ては。思ひ止らせ給へやとフシ袖を浸して諫言す。地泰衡錦戸等ことばを揃へ。詞なに兄々は勿論弟まで料簡して尤と同ぜしことを汝一人否といふは必定高館殿と一味と見えたり。しかれば我々に敵せん所存。全く其處を立たせじと膝立直し怒をなす。忠衡居直りいや。事をかしき騒動や。親兄の禮を重んじ諫言するが僻事か。天命をも恐れず悪逆無道のかたゞを兄とも人とも思はねば。是より直に高館殿へ參り御味方申すぞや。兄顔をしていらざる力みさあ。口程あらば留めて見よと。地四人をはつたと睨廻し。座敷を蹴立て歸りしはオクリ實にたのへもしくぞ見えにける。地兄弟四人は腹を立て。時刻移さず押寄せ先づ忠衡に腹切らせ。軍神に祭らんと照井金澤烏海に。三千餘騎を差添へ和泉が城へと三重へ押寄せけるさる程に。地和泉の三郎忠衡は急ぎ宿所に歸り。女房に近づき始終を語りければ。こはそも如何に我が君はなにとかならせ給ふべき。よし此の上は是非もなし。自ら女の身なりとも御身諸共御供し。共に如何にもなり果てん思へば〳〵あさましの浮世の中やと涙を流し申さるゝ。ヲ、よくぞ〳〵頼もしし。さすがは佐藤庄司の娘忠衡が女房程ありけるよ。詞然らば侍の最期に心掛りありては必ず不覺の死有りとや。地いざ二人の子供を害し心よく討死せん。それ〳〵とありければ女房少しもわるびれず。二人の若を召連れてオクリ父がへ前にぞ直しける。地無慚やな若どもは五つと三つに成りけるを。忠衡雙の膝に抱き。後れの髪を撫でく。しばし涙に咽びつゝ。ア、さて不便の者どもや。幾程添はぬ間を親となり子と生れ。剩へ父が手にかけ殺さん事前世の因果と云ひながら思へば辛き事どもかな。さりながら殺す父な恨みそゑる。これ叔父どもがなす業ぞ。念佛申せといふまゝに兄花若を引寄せて。胸元を二刀刺殺し押伏する。弟が是を見てわつと叫び怖いぞなう母上樣と抱きつく。忠衡心は消ゆれどもやれ花光よ。汝ばかりは行かぬぞ父も母も行くぞとて。母に其の儘抱かせながら胸のかゝりを一刀。わつとばかりを最期にて同じ枕に押伏せ二人が死骸の其の上に。夫婦諸共倒れ伏し擘も。惜まず泣きにけり。涙のひまより忠衡は。さても〳〵如何なる前世の宿業にて。現在の我が子をば。手にかけ殺すはかなさはア、あさましき武夫の。引くに引かれぬ弓矢の道。南無三寶しなしたり〳〵斯く迄武運盡くるものかとスエテ又平

伏してぞ歎きける。地女房も猶し心は消ゆれども。男に力をつけんと思ひ。御歎きは理なれどもさり乍ら。子供を殺し我々が。存らふる身でもなし。定めて御身や自らが。過去の敵が子と生れ御手にやかゝるらん。何事も定まる業必ず歎かせ給ふなと。さも契く宜へど。せき來る涙は白絲の フシ瀧津瀬に增すばかりなり。地忠衡聞て實に後れたり弓取の。心をゆるせば不覺を取る定めて押寄せ來らんと。子供が死骸を隱し置き郎黨どもを召集め。斯樣々々の次第なり用意せよとありければ。さすが和泉が家來とて命を惜む氣色なく。畏つて候と弓鎗長刀太刀刀。思ひ〳〵に腹卷し寄せ來る敵を今や今やと 三重〳〵待ちにけり。フシ時刻移さず。地敵の大勢三重三重に押つ取り卷き鬨をどつとぞ上げにける。地城の內にもかくと期したる事なれば。木戸を開き切つて出でを。兩方互に入亂れ火花を散して三重〳〵戰ひけりフシ忠衡は。地其の隙に物具して弓押張櫓に上れば女房も物具し。フシ長刀提げ續きらし。手に手をとつて內に入り。いざこれ迄と忠衡は鎧の上帶切解き。心靜に觀念し腹十文字に搔切れば女房やがて介錯し。刀の尖先口にくはへ打伏にかつぱと伏す。女房は二十九忠衡は三十三。惜しかるべき命かは誠にこれらが最期の體。忠とや云はん義とやせん前代未聞の次第なりとて惜しまぬ人こそなかりけれ。

地扨忠衡は大音揚げ。それへ寄せ來るは照井金澤鳥海とこそ見れ。某がいふ事をたしかに聞いて詳しく語れ。我が兄弟ながら汝等が主ども程貪慾無道の者はなし。あはれ命がな今一つ欲し。天命知らざる兄弟どもの成れる果が見屆けたや。今某が放つ矢汝等に射るにてなし。兄弟のものどもに恨の矢。一筋受けて見よといふまゝに。十三束三つぶせ。三人張にとつて番ひよつ引きちようど放つ矢が。一陣に進んだる金澤九郎が胸板をぐつと射ぬいて餘る矢が。うしろに控へし番場の兵衛が兜の左手の吹返しに。フシ火煙散して立ちたりけり。地是を始めて差つめ引詰めさん〴〵に射る程に。十七八騎射て落し。扨櫓より飛んで下り打物拔いてさしかざし。夫婦諸共切つて出でこゝを最期と 三重〳〵はげみけりフシ未だ時も。地移らぬ間に夫婦の人の手にかけて五十八騎斬つて落し殘りしやつばら四方へばつと追散

右此本者太夫直の正本をもつて板行致候されば初心稽古のためことぐ〳〵くかながきにしてふししやうぐぎり三味線ののりかたはどびやうし三重おくりの品々ひみつを殘さずあらはし令板行者也

江戸通油町
鶴屋喜右衛門
京寺町通二條上ル町
鶴屋喜右衛門
板元
凱陣八島